

わかった・できた！を実感させる算数科授業のあり方

—個別指導の充実と組織体制づくりを通して—

広島県 廿日市市立阿品台東小学校 横溝 改

1 主題設定の理由

平成29年度廿日市市学力定着状況調査の結果は、第3学年から第6学年において平均正答率が全国平均を下回っている。また、過去の平均正答率の推移から、どの学年も学年が進むにつれ全国平均との差が大きくなっている。このことから、それぞれの学年で習得すべきことがしっかり理解できないままに次の学年へと進み、「分からない、できない」という負の連鎖が起こっているという課題が明らかになった。このことは、当然のことながら文章問題の内容把握の難しさや既習事項の活用力不足にも直結しており、自分の考えを持つことができない児童が多いことの要因にもなっていると考えられる。

また、家庭学習の習慣が十分に身に付いていないことから、学習したことが定着していない実態もある。

これらの実態から、個別及び組織の両面から児童の学力向上に効果的な取組を考えていく必要があると考えた。平成30年度に、広島県教育委員会学力フォローアップ校事業の指定を受けたことをチャンスとして、「分かった、できた！」を実感できる授業づくりを目指して、児童の個別の課題に焦点をあてて取り組むとともに、全校で重点取組を決めて組織的、計画的、継続的に指導していく方法についての研究を開始した。

2 研究の仮説

算数科において、課題解決に向けた校内研究体制を構築し、個別指導を充実させる取組を行えば、授業において児童がわかった・できたと実感し、児童の学力が向上するであろう。

3 研究の内容

○研究の視点①（組織体制づくり）

- ・校内研修の進め方を改革する。（個の見取りを重視した研究にシフト、事前研修の充実）
- ・授業分析の視点に沿って観察し、研究授業を通して明らかになった成果と課題をもとに授業改善を行うとともに、次の研究授業に引継ぎ、改善を図ると同時に日頃の授業改善に役立てる。
- ・授業づくりの基盤を徹底する。（学習規律、学び合いのできる学級づくり、導入の工夫や見通しを持たせる場の設定、ノート指導の充実 等）
- ・阿東っ子タイム（朝タイム）及び家庭学習の充実を図る。

○研究の視点②（個別指導の充実）

- ・支援対象児童を決め、個別の支援計画を作成する。
- ・事前に全教職員で支援対象児童の実態からつまずきの要因分析を行い、考えられる手立てを考え、学習指導案を作成する。（学年内で事前授業を実施）
- ・児童の課題克服に向けた個別指導を充実させる。（授業&放課後&家庭）
- ・支援対象の児童の様子を記録し、変容を見取る。

4 研究の成果と課題

<成果>

○学力調査結果から

・4月に実施した全国学力・学習状況調査A問題の再調査を1月に実施した結果(第6学年対象)は、正答率40%未満の児童の割合は算数、国語共に減少しており、平均正答率も両教科で上昇している。県平均との差も縮まっている。

・1月に実施した標準学力テストの結果(全学年対象)は、目標を達成したのは、1・3・6年であった。その中でも特に、第6学年は、昨年度の結果と比較すると、正答率50%未満の児童が大幅に減少していることが分かる。このことから、学習内容は難しくなっているにもかかわらず、学びが積み上がってきているといえる。また、学級実態を見ても、年度当初から取り組んできた学習規律が徹底されており、朝タイムの取組(音声計算・子ども新聞の活用・習熟プリント等)も着実に実施されている。このようなことから成果が得られたと考えられる。

○児童の意識調査の結果から

・児童の学習に関するアンケートの結果では、『おもしろそうだな!』『やってみたいな!』と思うことがある」や「新しい問題に出会ったとき、それをといてみたいと思う」等、学習意欲に関する項目において、1学期に比べて2学期時点では大きく上昇している。導入の工夫などにより児童の学習意欲を喚起させることにつながったと考えられる。「算数の授業はよく分かる」という項目でも数値の上昇が見られることから、研究を通して行った授業改善が日頃の授業にも生かされたと考えられる。中でも「算数の授業では、問題をとくときには、前に習ったことが使えないかいつも考えている」という項目で学期を追うごとに大きく数値が上昇していることは、既習事項の活用が授業の中で着実に行われた成果である。

○校内研修に関わって

・全6回の研究授業やその後の研究協議のあり方を毎回見直し、改善することで、課題解決に向けた研修体制を構築することができた。(児童の見取り方・協議の視点の焦点化・要因分析のあり方等)

・児童のつまずき分析から、個に応じた支援の手立てを考え、その手立てが効果的だったのか検証をすることにより、具体的な取組につながった。

<課題>

○学力調査から

・標準学力調査の結果から、目標値を達成できていなかった2・5年生の結果を個別に見ると、2年生では78.8%、5年生では58.8%の児童が前年の得点を下回っていた。また、全国平均を下回った児童は2年生で28.8%、5年生で61.5%だった。このことから、学びの積み上げができておらず、課題を残したままになっていると考えられる。また、学級実態をみると、学習規律が徹底できていない場面が多く見られる。

○児童の意識調査の結果から

・児童の学習に関するアンケートの結果から、「算数の授業では、自分のとき方や考え方の説明をノートに書いている」という項目は、1学期より数値が下がっている。個人思考を深めるために自分の考えを書かせる取組を行っているが、自分の力で考えをノートに書き、課題解決できたという実感を持たせることが不十分であると考えられる。